

「白い象のような山並」から考える男女の価値観の違い

谷脇裕紀

米文学演習Ⅰの授業で扱った Ernest Hemingway の“Hills Like White Elephants”は私にとって、深く考える初めての文学作品と言えるかもしれない。この作品を読んだ感想、そして作者がいったい何を描きたかったのかを自分なりに考えてみようと思う。

作者はこの作品を通して、男女が求めるものの違いを描きたかったのではないかと私は考えた。登場人物の男性と Jig と呼ばれている女性は恋人同士である。作品中に直接出てくることはないが、この女性は妊娠しており、妊娠中絶をするかどうかについての話し合いが続けられている。話し合いの中で男性はプリント 65 ページの 2 行目で “But I don’ t want anybody but you. I don’ t want anyone else.” と言っている。私はこれを「僕に必要なのは君だけだ。君以外（赤ん坊も含む）は誰もいない。」という意味が含まれていると感じた。つまり、この男性は愛する女性が自分のそばにいてくれさえすれば自分は幸せになれると考えていて、二人の間に子供は必要ないと考えているのではないだろうか。作品全体でこの男性は女性が中絶をしたくないのであればする必要はないと言っている。しかし、自分では中絶をする方がよいと思っていて、胎児の命を絶つことにはあまり関心がないように感じられる。

だが、この感覚は女性にとっても同じだろうか。もちろんこの女性も男性を愛していて、男性からの愛も感じているようである。しかし、この女性のすべての台詞から彼女は中絶に対して乗り気ではないことが感じられるし、男性よりも中絶することを重く考えているようだ。確かに自分の体の中に胎児を宿している女性と生まれるまで自分の子供の存在を直接感じることはできない男性とでは女性の方が胎児に対しての思いが強いただろう。それにいくら簡単な手術とはいえ胎児の命を絶ってしまえば、自分の体の中から自分以外の命がなくなった感覚を直接感じられる女性は罪悪感にさいなまれ、この男性と今まで通りの関係を続けていくことが難しくなると考えているのではないだろうか。つまり、女性は既に胎児に愛情を持っていて自分の愛する男性はもちろん、胎内に存在する子供とも幸せな生活を送りたいと考えているのではないだろうか。

このように作者は男女間の求めるものの違いを表現しているのだと私は考察する。また、価値観の違いにより 2 人の生活が変わったことも表現されていることが感じられると私は考える。作品の前半部分で彼女は酒を飲み、“Everything tastes of licorice. Especially all the things you’ ve waited so long for, like absinthe.” と言っている。ここで言う「すべて」、「長い間待ち望んでいたもの」というのは酒の味だけではなく 2 人の生活のことを暗示しているのではないか。子供が存在しない 2 人だけの生活はリコリスのように甘いものだったが、その待ち望んでいた生活は、あるいは女性にとってその待ち望んでいたものは子供と生活することだったのかもしれないが、子供ができたことによってアブサンのように苦く重い悩みを抱えるものになってしまったことを表現しているのだと私は考えた。

このようなことから男性にとっての胎児は見ることも触れることもできず、存在しているのかさえよく分からないものと言えよう。また作品中に「白い象」という言葉が出てくるが実際に白い象も男性がこれまでに見たことがないもの、存在するのかどうか分からないものなので、男性にとっての胎児は作品中の言葉では「白い象」と言い換えることができるだろう。一方、女性にとって胎児はとても大きな存在である。作品中では「山並み」という言葉が出てくるが、山並みもとても大きなものである。そのため、女性にとっての胎児は山並みにも劣らないくらい大きな存在だと言うことができるだろう。よってタイトルにもなっている「白い象のような山並み」というのは男女のそれぞれの胎児に対しての考え方を組み合わせたものを象徴しているのだと私は考察する。

「白い象」の暗示するもの

吉見明莉

アーネスト・ヘミングウェイの「白い象のような山並」ではひたすら男女の会話が繰り返されていく。その会話の内容は中絶についてであるということが暗示されているが、どうやらおだやかな会話ではなくもめている様子が見受けられる。男は中絶してほしいと思っているが、女は中絶をしたくないと思っている。そのため口論が起こっているわけだが、男は何度も“*I don't want you to do it if you don't really want to.*”と言っている。ここで女が嫌だと一言いえば、話は丸くおさまるものの、女は嫌だと言わなかった。女は男の気持ちも尊重しようとしているのではないだろうか。男は物語の最初から最後まで中絶をしてほしいというただ一つの思いをぶつけていて、女の気持ちを全く考えていない。しかしそれと対照的に女は男の気持ちも受け入れようとしていて、女の気持ちは物語の最初から最後までずっと揺れているように思う。

女は一度中絶に同意するが、“*I don't care about me.*”と言っていることから少し投げやりになっている様子が見られる。葛藤しているのであろう。そしてしばらく口論を続けるうちに“*Would you please please please please please stop talking?*”と男に強く反抗している様子も見られる。そして最後には、“*I feel fine,*” she said, “*There's nothing wrong with me. I feel fine.*”と言っている。男の意見に振り回され、気持ちが揺れ動いていた女だが、最後には「気分がよくなった」と言っていることから、ある決断を下し、気持ちを落ち着かせたのだと思った。

そして、「白い象のような山並」というタイトルについてだが、女と男の会話で“*I know, But if I do it, then it will be nice again if I say things are like white elephants, and you'll like it?*” “*I'll love it. I love it now but I just can't think about it. You know how I get when I worry.*”とある。この会話の中で、white elephantsとは女が賛成しているもの、男が反対しているものであると思った。この物語の中で女が賛成していて、男が反対しているものとは赤ちゃんである。なので white elephants、つまり白い象とは二人の赤ちゃんの事を暗示しているのではないかと思った。そしてもしこの推測が正しいとしたら二人の赤ちゃんがタイトルになっているわけだから、女は中絶をせず子供を産んだのではないかと思った。

「白い象」は本当に望まれないのか

河内 康延

“white elephant”という熟語を辞書でひくと、一つ目の意味には「白象」という意味が出てくるが、二つ目の意味には「わずらわしい物」という意味が出てくる。この“Hills Like White Elephants”の短い物語の中では、「中絶」にテーマが置かれ、読み進めるうちに、“white elephant”というのが、女性のお腹の中にある赤ちゃんのことであると分かる。では、お腹の中の赤ちゃんは本当に煩わしく、望まれないものだったのであろうか。物語に沿って考えていきたいと思う。

まず、物語は二人が酒を頼むところから始まる。ビール、アニス・デル・トロと二人は飲んでいくが、私はここで疑問を持った。妊娠中の女性ならばふつう、酒を飲むようなことはしない。女性は先の見えないこの問題に対して、少しヤケになっていたのではないだろうか。だとすれば、この時点ではお腹の中の赤ちゃんは望まれない存在であると考えられる。

次に、中絶の話が本格的に始まるところを見ていきたい。酒を飲みながら、男が急に「本当にあっけない手術なんだよ、ジグ」と言い出す。この発言からはっきりと、男にとっては赤ちゃんが煩わしい存在であると分かる。一方、女性の方はというと、手術に対する不安からか、はたまたお腹に授かった子を失うことへの恐怖からか、なかなか中絶することを受け入れない。やはり女性が自らのお腹を痛めて授かった子は愛おしいものなのか、ここでは女性は赤ちゃんを産みたいという意味も含んでいると思われる。

女性のこの態度に、男性の方も「君がいやなら手術を受ける必要はないんだ」と言う。ここで二人は、お互いの未来について話しており、二人がこの先幸せにやっていくためには厄介な存在があると、男の発言からわかる。私はなぜ、男が女性に中絶をしてほしいのかと考えたときに、問題は二人の年齢の若さにあるのではないかと考えた。冒頭で酒を飲んでいるところから、成人はしていると思われるが、赤ちゃんが煩わしい存在であり、つまり育児をしていくのが負担であると考えれば、経済的にもまだ不安定な20代前半ではないかと思われる。現実的な考え方からすると、経済面が充実していないときに子供がいるというのは、確かに煩わしいことかもしれない。しかし私は、女性は子供がいることで得られる心の豊かさがほしかったのではないかと思った。

最終的に、男は「君に中絶なんてさせられない」と言い、女性の方は「私は大丈夫」と答えている。結局、赤ちゃんの運命がどうなったのかは分からず終いだ。私は、女性の最後の言葉に何か力強さを感じたので、彼女が中絶することを受け入れたのではないか、と思った。ただ、赤ちゃんが必ずしも煩わしい存在なのではなく、将来二人が望んで授かることになるのではないかと思う。

「白い」という言葉から連想するもの

宮部 優

White という単語がでてくる部分を引用してみると、

P.60 L1 The hills across the valley of the Ebro were long and white. On this side there was no shade and no trees and the station was between two lines of rails in the sun.

P.60 L21 The girls was looking off at the line of hills. They were white in the sun and the country was brown and dry.

“They look like white elephants” she said.

P.61 L29 I said the mountains looked like white elephants. Wasn't that bright?

このように景色での白、と白い象の白がでてくる。全体の文章からわかることは、ふたりは恋人であり、P.65 L3 “Of course it does. But I don't want anybody but you” などから男性が女性に結婚を申し込んでいるのがわかる。

結婚という具体的な言葉を使わず、男女の会話のやり取りと、周囲の風景の描写によって読者の五感を刺激させながら、二人の置かれている状況を読者に伝えることが、作者の狙いのように感じた。

よって、このように結婚、白から連想するに、「白い象のような山並」は結婚のウエディングドレスを表しているのではないかと思う。

その存在は

杉本裕一

「白い象のような山並 (Hills Like White Elephants)」は、1927年にヘミングウェイによって書かれた短篇で、列車を待つ間の男女の会話を描いたものである。以下には、物語の概要と、読み解く上でのポイントとなる点を挙げてその考察を述べる。

マドリッドに向かう列車を待つアメリカ人の男と一人の少女が、待合室で会話している。窓から見える山並みに、少女は「白い象のようだ」と言うが、男はそ知らぬふりをする。酒を飲み交わしながら、二人の会話は段々とある「手術」に関することへとフォーカスしてゆく。男は「空気を入れるだけのきわめて簡単な手術だから、心配は要らない」「(君が) 受けたくないのならばしなくてもよい」といようにのたまうが、少女はその呼びかけに乗り気でなく、手術の話の止めさせようとする。

この物語の主軸となっている「手術」とは何か考えてみると、男の発言から墮胎のためのものであることがわかる。それと同時に、話題の中心にあるもの一つまり、登場する男と女のあいだにあるもの—それが、少女が身ごもっている赤子であるということも。このことが明らかになると、明るく白っぽい風景の描写とは裏腹に、この小説は暗く深い広がりを見せる。

このアメリカ人男性と少女の関係性は、赤子を挟んで繋がっているらしいということ以外は何もわからない。このあいまいな関係性がこの短篇にもやをかけている第一のポイントである。ゆえに様々な仮説が立てられる。この二人が夫婦なののだとしたら、経済的な事情から男が子どもを産ませまいとしているのだろう。もしこの二人が夫婦でないのだとしたら、男のほうには妻がいて、この少女は愛人で、浮気心が妊娠を呼び寄せてしまったので、それを清算しようとしているのかもしれない。男がスペイン語に堪能な様子が描かれていることから、男が国際的な仕事をしていて、現地で知り合った女と一夜を共にして、それで今に至ると考えることもできる。後者のほうが仮説として有力だ。

また、「Hills Like White Elephants」という表題および作中に登場する比喻も、様々な示唆に富んでいるといえる。まず Hills は、この作中では複数形でしか書かれていないために「山並み」としていっぱいに訳されているが、辞書に載っている基本的な意味としては「丘」という日本語が当てはまる。イメージとして、こんもりとした丘の形状が、妊娠して膨らんでいるお腹の暗示と推察できる。このイメージを踏まえて、それがまるで「White Elephants」のようだと言われる意味を考えてみる。「白象」について調べてみると、東洋と西洋ではまるで逆の意味を持つことがわかる。まず東洋、とりわけ東南アジアにおいては、仏教の始祖・ゴータマ＝シッダールタの母であるマヤーが、脇から白い象が入り込む夢を見て、その後シッダールタを懐妊したことから、白い象は「幸福の象徴」として認識されており、現在でもタイなどのお祭りでは白い象が度々登場する。対して西洋・英語圏では、植民地時代に支配した国々で行われるそのような式典のために用意される白象は高価で、しかも象の飼育費用もばかにならず、「無用の長物」などといった意味が浸透している。したがって、あくまでも仮定の域を出ないものの、冒頭で「アメリカ人男性」とは別に書かれている「少女」とは、仏教徒なのではないかという線が浮かび上がってくる。洋の東西を隔てて、「無用の長物を抱え込んだ腹」と「幸福を象徴している丘」すなわち「生まれくる命を抱えたお腹」という真逆の意味がこの表題には隠されている。この二人の間での認識の相違が、このけだるく陰悪な会話のムードを作り上げており、奥深く捕らえどころのない闇をこの物語に与えている。

講義のあと、受講生の印象を一人ずつ聞いてみると、男と女ではまた解釈が違うことに気付かされる。これは作者のヘミングウェイと私自身が男であるからかも知れないが、この物語ではアメリカ人男性の卑怯な思惑のほうが正確に読み取れ、女はその思惑にただただうんざりしている。男性がこの小説の人物のような卑怯な人物にならないでおこうと考えることは簡単である。けれど、女性はこの先交際する相手がこのアメリカ人男性のような人間でないと完全に見抜くことはできない。いつ自分が小説の少女のように孕ませられ、結果として墮胎の手術を受けなければならなくなるかも知れない。お腹に抱えている一つの命を生かすか殺すか、そう考えたときに心が受ける問題の重さは、男と女で物語の解釈を決定的に変えてしまう点であるように思われる。小説を読みながらはまっていく深い闇の中で、いつの間にか男と女は違う道へ導かれていくのである。

“HILLS LIKE WHITE ELEPHANTS” を読んで

一心に横たわる白い象のような山並

寺村友樹

この作品には男、娘、そしてバーの女性店員の三人の人物しか登場しない。さらに、これらの登場人物に関する描写が、主人公であろう男と娘に関してすら、全くと言ってよいほど描かれていない。表現されているのは、男と娘の短い会話のかけあいと、その背景にある自然の描写がほとんどである。男と娘の会話にはこれといってインパクトのあるフレーズや感情をあらわにした表現はない。むしろあいまいな表現や単純な会話をテンポ良く続けている。しかしそんな一見無機質に思われる会話からは、読み手によって様々異なるであろうが、この男女の関係、感情の変化などを推測することができ、さらに会話の合間に描かれる背景描写も、それらを暗示しているのではないかと思わせる。

Operation(手術)という単語や二人の会話から、二人は男女の関係であり、話題の中心になっているのは娘の妊娠であり、そして中絶であることが想像できる。二人はこの大きな問題に直面し、答えを出さなければならないが、男と娘にはそれぞれ、この問題に対する姿勢の違いを読み取ることができる。娘は序盤、目につくものをそのまま話題として次々に口に出し、直面する大きな問題に関して話をするのをためらっているようである。一方で男は娘の切り出す話題に耳を貸しながらも、そこには焦点は当たっておらず、淡泊な返答をしているように思われる。また、いよいよ本題に関して話し始めると男は、if you don't want to you don't have to. のように娘を気遣ったような発言を繰り返す一方で、その手術はとても簡単であり、心配ないと促し続ける。

これらを例に、作者がこの作品を通して描いたのは人間のそれも男女関係におけるリアルな感情であり、いやらしさなのではないかと感じた。男にとって、娘に子どもを産まれることは不利益であり、また娘は男がそのように考えていることも、さらには自分の気持ちは一番に考えられていないことも分かっている。分かっているながらも愛する男の説得に強く抵抗できない。このような二人の感情の衝突が、単調な会話の中から非常に色濃く感じとられた。そして、このような状況に立った以上は、この二人はどのような決断を下したとしても、真に愛し合うことはできない。お互いの本心を露呈せずにはいられないこの事態を経験したのちには、二人の感情の間には必ずわだかまりができ、それを取り払うことはできない。「白い象のような山並」というタイトルは、この男女が単なる男女の関係を続けることができなくなる、消すことのできない二人の間の大きな心の壁を暗示しているのだろう。

「白い象のような山並」に想うこと

千葉紗里衣

私はこれを読んで、「白い象のような山並」というのは、普通の象とは違って白い象ということは普通の象とは違って不要なもの、この zig という女性のおなかの中にいる赤ちゃんに対する男の考えだと思った。隋胎を巡る会話の中で、「I don't want you to do it if you don't really want to.」と男性は言っているが、もしもこの赤ちゃんのことを男が望んでいるのならそんなに遠回しな表現を女性に言わないだろうし、本当のところは隋胎することを望んでいるのだろうと感じた。しかしこう見ると、女性が立場的に弱い位置にいるのかと思うが、このあとの「you wouldn't have. あなたには見えないでしょうね。」という一文を読んだときにこの女性の何か強い部分を見たような気がした。

筆者はこのようなことを、日常的な会話の中に含めながら、この会話に二人の心情を表しているような不安定さや脆さなどを表現したかったのだろうと思った。

この小説の良い点は、女性の心理描写がとてもうまく描かれていることだと思う。不安になったり、怒ったり、穏やかな気持ちになったり、そういう心理の変化がとらえやすいところがいいと思う。悪い点は、会話の内容があいまいで、いきなり突拍子もないことを言ったり、意味をとらえにくいと思った。しかし、その会話のあいまいさがまたこの二人の心の中を表していて、二人の会話がかみ合っていないところが二人の考え方のかみ合わない切なさを表しているようで面白いと思った。

大切な、二人にとって重要な内容の話をしているのに、淡々と交わされる会話の空しさや、この二人を取り巻く周りの情景描写がとてもしみしく、暗い印象を感じた。

虚言の山

辻本希望

この短篇は、**he** と **girl** の何気ない会話から始まり、**girl** が受ける手術という問題に話が進んでいく。しかし、この **he** と **girl** にはそれぞれの思うところがあり、その思惑のずれによって、二人のやりとりが終始かみ合わず、非常に気味の悪い文章になっている。

まず冒頭の会話についてだが、**girl** の発言に対し、**he** が気持ちのこもっていない返答をしているのが印象的だ。ここで、**he** の頭の中は **girl** の手術の問題で頭がいっぱいなのだろう。女はそれに堪えきれず、「リコリス」（飲み物の種類？）の件で怒りを顕わにしてしまう。この部分の女の「引用 p.61 L29 わたしだってそう（＝楽しく）しようとしてたんだもの」という発言から、女は何気ない会話をすることで、手術という現実問題から目を、或いは話を逸らそうとしていたことが伺える。反対に、この後 **he** が唐突に手術の話を持ち出しているのが、印象的だ。

手術の会話において、二人の思惑のずれがますます顕在化してくる。**he** は、「**girl** のために思い、手術を勧めるものの、最終的には **girl** の気持ちを尊重する」という態度をとっている。しかし、それに対し、**girl** は手術に対して乗り気ではなく、（しかし、駅に来ているということは手術をすることは決まっているのだろう）投げやりな態度である。**girl** は自分の問題である手術になぜここまで乗り気でないのか、おそらくこの手術は **girl** だけの問題でなく、**he** にも損得が絡んでくるもので、なおかつ、**he** と **girl** の関係（おそらく、愛人関係である）を考えると、中絶手術か何かだと推測される。（最近見た映画『八日目の蝉』でも、不倫男が、相手の事を気遣っているように見せて、実は損得勘定だけで中絶を勧めるシーンがあった。）そう考えると、「引用 p.63 L25 そんなふうに思ってたんだら、やる必要はない」という言葉でさえ、実際は **he** のレトリックであり、「**girl** の感情を一切無視し、自分自身の事しか考えていない」のである。

その二人のやりとりの中で特に印象的だったのが、次の会話だ。

引用 p.64 L1 ~ 15

「わたしたち、これを全部自分のものにできるのに。全部わたしたちのものにすることだってできるのに、わたしたちときたら、毎日毎日手の届かないものにしてしまってるのね」「なんでもおれたちのものにできるよ」「そんなこと無理」「世界全部をおれたちのものにすることだってできるさ」「いいえ、できない」「どこにだって行ける」「行けないわ。もうわたしたちのものじゃないもの」「おれたちのものさ」「そんなことない。一度、手放してしまったら、もう二度と取りもどすことはできないのよ」「まだ手放してしまったわけじゃない」「どうなるか待つて見るしかないのね」

ここで **he** と **girl** は一体何の話をしているのか？何を手放すのか？何を取り戻すことができないのか？これは、**he** と **girl** のどちらの視点に立つかで大きく変わっていく。おそらく、**he** にとっては「**girl** と一緒に見る世界（二人きりの）」（カバンに貼られた何枚かのホテルのステッカーから、二人はよく色々な場所に旅行していたことが分かる）、**girl** にとっては「自分の子供と一緒に見る世界」（或いは、女は相手に対する「信頼」の事を指しているのかもしれない）なのだろう。この二人の間の「ずれ」による違和感がこの短篇の面白さで、誰の視点に立つかで話の様子が変わってしまう。作者が、あえて男を **I** にせず **he** にしたのは、読む人に多角的な視点を与えたかったからかもしれない。

会話が続いていく内に、利己的な **he** に **girl** は目に見えてうんざりしていく。そして、ラストのシーン、

引用 p.66 L1 ~ 5

彼はすだれをくぐって外へ出た。娘はテーブルの席に腰かけたまま、彼に笑いかけた。「気分は良くなった？」「大丈夫よ」娘は答えた。「気分なんてちっとも悪くない。わたしは大丈夫よ」

このシーンは鮮烈だ。先述したが、外へ出る（＝汽車に乗る）ということは、手術を受けることを意味する。つまり、外に出た **he** に対し、イスに座ったままの **girl**。 **girl** は手術を受けないことを決めたのだろう。そして、最後の言葉を言い放つ。

最後に、「Hills Like White Elephants」というタイトルについて。この white elephant には「厄介物」や「無用の長物」という意味があるらしい。この話では何が white elephant だったのか？それは、**he** にとっては、娘の膨らんだお腹、つまり「子供」が white elephant であり、視覚的にもそう見えたかもしれない。**girl** にとっては、「**he** との一連の会話」の事を指していたのだろう（先述したが、駅にいる時点で手術は決定事項であり、手術をしないについての **he** との会話自体が無意味である。或いは、**he** がどんなに調子のいいことを言い連ねても、もう女性の決心は変わらない、それは女性にとって苛立たされるだけの虚言の山でしかないということだと言える）。

わが身世にふるながめせし間に —文学作品における共通性—

黒田 勇人

私が「白い象のような山並」を読んで、何よりもまず疑問に思ったのは、タイトルである。はたして登場人物の女の子（ジグ）は、会話にもあったように本当に山並みが白い象のように見えたのだろうか。答えはノーだと思う。少なくとも我々日本人の感覚で言えば、山並みが白い象に見えると言われても、共感できる人は多くないと思う。では、どうしてそのような喩えを使ったのだろうか。この点に注目して考えてみた。

というよりも私自身、高校時代に偶然にも、動物を使った慣用表現を調べる機会があったので、white elephant の意味をすでに知っていた。だから、タイトルの裏にあるもう一つの意味はすぐに汲み取ることができた。それには白い象という意味と無用の長物という意味の慣用表現が含まれている。

作品を読み進めながら、いったい何が無用の長物として扱われているのだろうと考えていた。先生が妊娠中絶の話を読んだときに、ピンと来た。話の流れから考えると胎児のことだ。ジグは何度も「白い象（無用の長物）のようね。」というセリフを言ったが、もちろん一つ目の意味は、「山並みが白い象のように見える。」だが、もう一つは「（胎児は）無用の長物のようね。」という意図で発言されていたということが分かった。

この表現はどこか日本の掛詞に似ているなど感じた。小野小町の「花の色は～」という歌は有名だが、「わが身世にふるながめせし間に」という部分に「降る・経る」、「長雨・眺め」の掛詞がある。white elephant もそういう意図があったのだと思う。

私自身日本の文学はもちろんだが、英文学、米文学に大学で少し学ぶ機会ができた。この作品を通じて、世界中の文学における共通性を見出すことができたのではないかと思った。そして、作者の意図が初めて垣間見られたことに感動したし、文学のおもしろさが少し分かったような気がした。

ただ、私が思うこの作品の素晴らしさはタイトルだけでなく、「白い象」、「無用の長物」のそれぞれ片方だけの意味でストーリーが読めてしまうことだと思う。日本の歌のように短いものではなく、何より一つの小説に仕上がっていることがすごいなと感じた。

大学の文学の講義で、人名や地名にも作者、作品の意図が表されているということを学んだので、この作品の登場人物であるジグ（Jig）の名前を辞書で引いてみた。すると、スラングだが、「詐欺師、ペテン師」の意味があることが分かった。私はこれと何か関係があるのかもしれないと考え、ストーリーを解釈してみることにした。

女の子の名前が「詐欺師、ペテン師」だということから推測すると、女の子が何か嘘をついて男を騙しているということになる。いったい何を騙しているのだろうか。この作品の主題は妊娠中絶であるので、妊娠が嘘なのかとも思った。しかし私はこう考えた。宿っているのが本当にこの男の子どもなのかどうかということだ。勝手な解釈かもしれないが、実は違う男の子どもなのかもしれない。詐欺師、ペテン師という意味の名を持つことからして何か隠している、騙しているのではないか。わざと中絶に反対して、男と別れる口実を作っているのではないか。

何も考えずに読むと、我々なら中絶をしると言っている男に悪印象を持ち、中絶するか悩んでいる女の子に同情を抱くが、上に述べたような解釈をするとまた、かなり違った印象を持つことになる。

このように、様々な解釈が可能で、読者がどう解釈するかによってストーリーが変わってしまう。個人的にはこの点が非常に面白かった。小野小町のような日本の歌にもそれぞれの違った解釈を楽しめるように作られている。これが、「Hills Like White Elephants」と共通してまた興味深かった。おそらく作者はこの作品を通じて、表と裏の見方、すなわち世の中のあらゆる物事に対する人間の見方を我々読者に伝えたかったのだと思う。

それと同時に、よく「物語は作者ではなく、読者が創る」と言われるが、この作品によって私はまさにこのことだと改めて感じさせられた。これから文学作品を学ぶ際には、今回の作品のように、作者の意図や人名や地名などの裏に込められた意味を探りながら自分なりに想像をどんどん膨らませて読んでいきたいと思った。